
誘惑

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
誘惑

【Nコード】
N1413Y

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
雄一郎の肩のところに悪魔が来て色々と誘惑してくる。しかし彼はお寺の息子で。日本人の宗教観なんかも参考にして書かせてもらいました。

第一章

誘惑

急にだ。耳元にだ。声がしてきた。

「なあ兄ちゃん」

「借金の勧誘ならお断りだよ」

彼、如月雄太郎は素っ気無く返した。ブルゾンにレザーパンツ、髪は前に派手に伸ばし青緑と赤のメッシュに染めている。かなり派手な若い男だ。

その彼がだ。こう声に返した。

「闇金だったら今から警察に通報するから」

「本当に素っ気無いな」

「ティツシュなら貰っておくよ」

今度はこう返す彼だった。

「それなら頂戴」

「ティツシュじゃないよ」

これはそれではないというのだった。

「生憎だけれどね」

「じゃあ何なんだよ」

「彼氏欲しくないかい？」

声は言ってきた。

「とっておきの彼氏ね」

「俺そっちの趣味ないから」

歩きながらやはり素っ気無く返す。

「残念だけれどね」

「おっと、間違えた」

しかした。声はここでこう言ったのだった。

「彼氏じゃなくて彼女ね」

「出会い系？俺そうしたことには興味ないから」

「何かさばさばしてるね」

「それが俺だから」

前を向いたまま話していく。やはり歩きながらだ。

「そういうことだから」

「そうなんだ。じゃあね」

「じゃあ。今度は何だよ」

「出会い系じゃないから」

声は今度はこのことを否定するのだった。

「そんな軽いものじゃないから」

「ふうん。じゃあ何なんだよ」

「おいら悪魔なんだよ」

声は言ってきた。

「ちよつと横見してみて。左の方ね」

「悪魔ねえ」

声に興味を持ってその左の方を見てみるとだった。そこには。

黒い身体に蝙蝠の翼、曲がった角と先が三角になった尻尾、それと大きなフォークを持っただ。漫画に出て来るそのままの悪魔が雄太郎の横をばたばたと飛んでいた。

その悪魔を見てだ。雄太郎は言っただった。

「本当に悪魔なんだな」

「これでわかってくれたかな」

「それで彼女を紹介してくれるって？」

「紹介どころかプレゼントするよ」

そうするといふのである。

「ちゃんとね」

「へえ、プレゼントね」

「兄ちゃん今彼女いないだろ」

悪魔は率直に彼に問うた。

「だからこうして来たんだけれどね」

「ふうん、それだからね」

「で、どう？彼女欲しい？」

「別に」

ここでも素っ気無く返す雄太郎だった。

「正直なところね」

「どうでもいいんだ」

「そう、三日前にさ」

何故いらないのか。彼はその理由を悪魔に話す。

「付き合ってた彼女がさ。女の子とできてさ」

「ああ、レズに走ったんだ」

「プロレスラーのスワロー岩村にさ」

「あの極悪非道の狂暴レスラーにかい。よりによって」

「そつだよ。寝取られたんだよ」

よりによってだ。女子プロレスラーにだというのだ。

「もうダメージがでかくてさ。彼女は当然御免だよ」

「男に寝取られるのはあつても女に寝取られるのはね」

「ある意味貴重な経験だろ」

「普通はないよな」

悪魔もだ。腕を組んでこう言うのだった。

「阪神の選手が巨人に行くことと同じ位」

「それやったら殺されるからな」

だからそれはないというのだった。

「とてもな」

「そつだろ。とにかく今は彼女はいいからな」

「何だよ、折角彼女プレゼントしようと思ってたのに」

「大体あんた悪魔だろ」

「ああ、見ればわかるよな」

「悪魔と契約したら魂取られるよな」

実に古典的な話にもなった。

第二章

「俺そういうの嫌だから」

「こんなことで魂なんか求めないよ」

悪魔はそれはないと言った。

「だってさ。彼女プレゼントなんて些細なことだから」

「些細か」

「魂を貰うとすればそれこそ」

どうかとだ。悪魔は雄太郎に話す。

「あれだよ。阪神を十連覇させるとかいうレベルじゃないとね」

「そんなことできるのか？」

「絶対に無理だけれどね」

阪神の十連覇はだ。不可能だというのだ。

「天地をひっくり返す様な話だからね」

「魂を貰うにも一苦労なんだな」

「まあ。阪神の十連覇は無理でも」

それは置いておいてだった。

「大金持ちになるレベルだよ。魂を貰うって話は」

「俺家お寺だから仕事あるから」

雄太郎は自分の家の話をはじめた。

「親父の跡継いで住職になるし。仕事はあるからお金にも家にも困
つてないから」

「ふうん。っていうか兄ちゃん坊さんかい」

「これでも大学で坊さんの資格も取ったし修業もちゃんとしてるぞ」

「そのパンクな格好で？」

「そうだよ。信仰は心だよ」

とても僧侶には見えない格好での言葉だった。

「ちゃんとしてるさ」

「っていうか坊さんが悪魔と話すって」

「あからさまに宗教違うな」
「何か話がおかしくなってきたけれど。坊さんでも彼女いるんだ」
「日本ではいいんだよ。それに俺の家は浄土真宗なんだよ」
その宗派では最初から妻帯もいいのだ。親鸞上人からだ。
「全然平気なんだよ」
「そうなんだ」
「そうだよ。で、彼女の話だけねどな」
「何だよ、パンク坊主」
雄太郎をそれだと言っ悪魔だった。
「彼女がどうしたってんだよ」
「何だ、その言い方」
「だから。あんたパンクやってんだろ」
「ヘビメタだよ」
それだと返す雄太郎だった。
「俺はヘビメタ派なんだよ」
「今時ヘビメタかよ」
「ヘビメタ馬鹿にするな。あのよさがわからねえってのか」
「おいらジャズ派だからな」
悪魔の趣味はそちらだった。
「ヘビメタに興味ないからな」
「ジャズかよ」
「サッチモは最高だよな」
ルイ・アームストロングである。アメリカジャズを確立した歌手の一人だ。
「あのバスとサックスはな」
「渋い趣味だな」
「いい趣味だろ」
悪魔は誇らしげに雄太郎に言う。
「やっぱリジャズだよ。コーヒーカーボンを飲みながらカウンタ―で聴くんだよ」

「本格派だな」

「そうだよ。それであんたどうしたいんだ？」

「願いか」

「ああ、折角だから願ひ適えるぜ」

話が戻った。本来の話にだ。

「何でも好きなこと言ってみな」

「別にないな」

ところがだ。雄太郎はここでもこう言うだけだった。

「正直なところな」

「何だよ、ないのかよ」

「何度も言っけれど彼女はいいからな」

それは完全に否定するのだった。

「当分な。一人でいいからな」

「それで金や仕事もか」

「坊さんになるからな」

「食い物はどうなんだよ」

「食えれば何でもいいからな」

それについても無欲な彼だった。

「野球だつてな」

「あんた阪神ファンだろ」

このことはこれまでの話から察することができることだった。それで悪魔もここで雄太郎に対してこのことを尋ねたのである。

第三章

「それだったらな」

「優勝させられないだろ」

「あのチームに絶対ってことはないからな」

悪魔も言う。とにかく阪神というチームには絶対はない。絶対に優勝できるような状況でもだ。それが適わないのが阪神なのだ。

「ケンタッキーのおっさんの呪いよりもえげつない呪いがもうかかってるんだよ」

「最初からかかってたのかよ」

「甲子園なめるなよ」

他ならぬ阪神の本拠地である。

「魔物がいるんだよ、魔物がな」

「悪魔より強いのかよ、あの魔物は」

「強いな。魔神クラスだ」

レメゲトンに封印されていたその七十二柱の魔神だというのだ。

「洒落になってないな」

「そこまで強かったのか、あそこの魔物は」

まさにそこまでだというのだ。

「しかも只の魔神じゃなくて相当高いランクのな」

「阪神もまた厄介なのに呪われてるな」

「だからそれは諦めろ」

阪神の優勝についてはだというのだ。

「おいら程じゃ無理だ。それこそ天地がひっくり返る様な話だからな」

「じゃあいいさ。まあ流石にそれは無理だと思ったしな」

「そうだよ。それでな」

「願いだな」

「本当に何にするんだよ」

悪魔はあらためて問うた。

「女も金も仕事も食い物も阪神もいっていったらよ」

「服もあるしな」

「あんたその服趣味悪いな」

悪魔から見ればだ。ブルゾンとレザーパンツは趣味に合わないというのだ。

「今時その格好なんてな」

「悪いかよ」

「少なくともおいらの趣味じゃないな」

「けれど服はこれでいいからな」

「そうか。着るものにも興味はないんだな」

「いよいよだ。悪魔にとっては手詰まりになってきた。」

「何かないない尽くしだな」

「俺は満ち足りてるけれどな」

「おいらはないんだよ」

悪魔自身の話だ。確かに彼にとってはそうだった。

「全くよ。どうしたものだよ」

「諦めたらどうだ？」

「あんたと契約することかよ」

「ああ。願いは阪神の優勝位だけれどな」

「それは絶対に無理だしな」

「じゃあ諦めるよ」

本当に素っ気無く言う雄太郎だった。

「契約しなくても生きられるんだしな」

「困ったな。これじゃあノルマがなあ」

悪魔もだ。雄太郎があまりにも素っ気無いからだ。

腕を組んで胡坐をかいて浮かびながらだ。こう言うのであった。

「何とかならないかね。契約っていつでも代償は大したことないんだよ」

「魂じゃないっていったよな」

「ああ、髪の毛な」

「ここでの話になった。」

「髪の毛を貰う位だな」

「髪の毛？」

「そうだよ。実は俺の上司が今髪の毛が薄くなって困ってるんだよ」

「悪魔でも禿げるのかよ」

「っていうか悪魔の世界は人間よりもずっと禿が問題になってるんだよ」

「初耳だな」

「それこそフランスかドイツ以上にな」

「禿が問題になってるその両国よりもだというのだ。」

「チーズとかビールって髪の毛にはよくないみたいだな」

「ふうん、髪の毛な」

「魂なんてせいじょそこいらの悪党の魂を適当にちよろかまかしたらいいしな」

「それで手に入れているというのだ。魂はだ。」

「天界の奴等が拾わない屑の魂な。おいら達にとっちゃそうした魂の方がいいしな」

「だから魂を要求しなかったんだな」

「そういうことだよ。それで髪の毛が欲しいんだけれどな」

「何か凄く切実な話だな」

「ちよつとでいいんだよ」

「悪魔は言った。」

「髪の毛な。貰えるか？」

「羊の毛じゃ駄目か？」

「駄目だよ」

「悪魔はそれはすぐに駄目出しをした。」

第四章

「それじゃあ意味ないから」

「何だよ、じゃあ山羊でいいか？」

「山羊も駄目だよ」

「それも駄目だというのだった。」

「だから。人間の髪の毛じゃないとね」

「贅沢な話だな」

「人間の髪の毛を。育毛してね」

「話はかなり俗世のものになっていた。」

「それで増やしていかないといけないんだよ」

「何か人間と同じだな」

「悪魔でも禿をなおすことはできないんだよ」

「あまり力ないんだな」

「禿はどうしようもないからね」

「悪魔でも誰でもだ。禿はどうしようもないというのだ。」

「その話をしてだ。さらにだった。」

「だから。どうか」

「髪の毛かよ」

「それが欲しいし。おいらと契約しない？」

「そうだな。そこまで言うんなら」

「雄太郎は腕を組んで考える顔になってだ。それから話すのだった。」

「俺実はな」

「実は？」

「結構きてるんだよ」

「こつ悪魔に話すのだった。」

「髪の毛な。実はな」

「んっ、そういえば」

「悪魔はここで彼の頭をよく見た。するとつむじの方がだった。」

「危ないね」

「わかったな。そういうことなんだよ」

「つむじから来るタイプなんだ」

「しかもこの髪の色だよ」

その青緑と赤のメッシュの髪を自分の右手の人差し指で指し示してからの言葉だった。

「染めてるからな」

「ああ、染めたらまずいよ」

悪魔はその髪を見ながら話す。

「そのつむじでそれだから。確実にね」

「禿げるよな」

「まあ近いうちに砂漠になっちゃうね」

「言いにくいことをよく言うな」

「だってその未来は確実に見えるから」

「それでかよ」

「じゃあそれ？」

悪魔は彼の髪を見ながら話した。

「髪の毛が欲しいだね」

「いいか、それで」

「ああ、それならできるよ」

悪魔は契約とその報酬の矛盾に気付かないまま雄太郎の言葉に頷いた。

そのうえでだ。悪魔はこう彼に話した。

「髪の毛増やすから」

「そうしてくれ」

「それで契約の報酬はね」

「髪の毛だな」

「うん、あんたの髪の毛貰うから」

雄太郎に顔を向けて話す。

「それでいいね」

「ああ、じゃあな」

雄太郎もだ。矛盾に気付いていない。こうしてだった。

悪魔はそのフォークを雄太郎の頭に向けてだ。それでそこから光を放ってだ。

それで髪の毛は増えた。つむじのところが黒々となった。しかしだ。

それは瞬時に消えてだ。元に戻った。それでなのだった。

悪魔はだ。そのことにきよとなりながら話した。

「あれっ、元に戻ったね」

「どうしてなんだよ」

「ああ、髪の毛のことで契約したけれど」

「そうか、報酬はな」

「髪の毛じゃない」

それでなのだった。二人は今わかったのだった。

第五章

「だからこうなったんだよ」

「成程ね、それでなんだ」

「そうだよ。それでだよ」

悪魔はその元に戻った雄太郎の頭を見てそれで話す。

「だからこうなったんだよ」

「じゃあ何の意味もないじゃねえかよ」

「そうだね。けれどさ」

「けれど。今度は何だよ」

「別にいいじゃない」

笑ってだ。それでもいいだろうと話す悪魔だった。

そしてその理由もだ。笑いながら話すのだった。

「あんたどっちにしろお坊さんになるんだよね」

「ああ、そうだよ」

「それならいいじゃない。髪の毛剃るよね」

「俺の宗派は別にそうでもないけれどな」

「まあ仏教のお坊さんだから」

宗教が違ってもた。悪魔はそのことを知っていた。それでなのだった。

彼はだ。あらためてこう話すのだった。

「いいじゃない、なくなったら剃ればね」

「それでいいんだな」

「そう、いいじゃないか」

「つたくよ、気軽なものだな」

「他人ごとだし」

悪魔は何処までも明るい。

「それよりもさ。あれだよ」

「あれって何だよ」

「折角あれこれと誘惑したのに」

そのことにだ。悪魔は困った顔で話すのだった。相変わらず歩いている雄太郎の顔の横を小さな翼でばたと飛びながら話すのである。

「それには全然乗らないからね」

「適えて欲しい願いは無理って言っただろうが」

「だからそれは無理だから」

阪神のことはどうしてもだというのだ。

「そういうことだからね」

「小さい話だな」

「そうだね。まああれだよ」

「あれって何だよ」

「所詮人間も悪魔も一人一人はちっぽけなもんだよ」

話はだ。急に哲学的なものになった。

その哲学的な視野からだ。悪魔は雄太郎に話すのだった。

「大した願いはないし適うものも大したことはないんだよ」

「御前が言うのかよ」 102

「言うよ。まあそういうことだから」

「そうかよ」

「とにかく。契約はね」

そのことについての話にもなった。それは。

「まあこれで終わりだからね」

「終わりかよ」

「そう、終わりだから」

そのことについてはだ。悪魔は明るい顔で話した。

「御疲れさん」

「って俺何もしてないぞ」

「ついでに言えば何にもなっていないよね」

「そうだよ。それで御疲れさんって言われてもな」

「どっつてことないんだ」

「ああ。けれどこれでお別れか」

雄太郎の方から言うのだった。

「それじゃあな」

「うん、じゃあね」

「本当に何だったんだ？」

また雄太郎から言う。彼にしては何だったのか最後までわからない。

それでだ。首を傾げていたがだ。その彼に悪魔が言う。

「いいじゃない。悪い結果にならなかったし」

「その代わりいい結果にもならなかったな」

「差し引きゼロだね」

「これが悪魔の契約か？」

「世の中ってそんなのだろうね。とどのつまりは」

ここでも妙に哲学的なことを言う悪魔だった。そうしてそのうえでだ。

彼はだ。雄太郎に最後に話した。

「おいら達悪魔もいれば天使もいるしね」

「仏もいるしな」

「宗教違うけれど大した違いじゃないか。じゃあまた縁があつたら」

「その時俺の髪の毛はどうなってるんだ？」

「砂漠になってるね。絶対にね」

これが悪魔の彼への最後の言葉だった。このことを言い残してだ。悪魔は姿を消した。そして残された雄太郎は首を傾げさせてこう言うだけだった。

「悪魔が仏教の坊さんのところに来るのか。変な話だよ」

自分のそのパンクかヘビメタの格好には何も思わずにだ。こう言うのだった。そのやがてなくなる髪の毛をいとおしそうに触りながら。

誘惑

完

2011・5・29

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1413y/>

誘惑

2011年11月2日02時09分発行